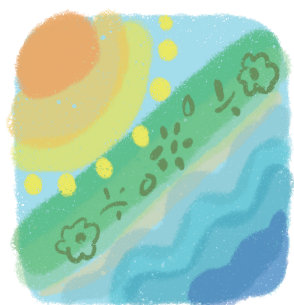


恥から誉れへ

人目が気になる生きづらい世界で

創世記から黙示録まで
聖書全体の学び



はじめに

この8回の学びを通して、聖書の始まりから終わりまでを学ぶことができます。このような学び方は「聖書神学」と言われています。

「組織神学」では「結婚」、「仕事」、「赦し」や「再臨」といったテーマを挙げて、論理的かつ組織的に、テーマに関する聖書の教えを学びます。組織神学では、聖書のいくつかの箇所（証拠聖句）を踏まえた上で、様々な主張を論理立てて述べます。一方、「聖書神学」では、聖書の中のつながりを考え、聖書の最初から最後までの流れを学びます。また、聖書全体の流れの中で短い部分を集中して考えることもあります。

どちらも、大切な聖書の学び方ですが、しっかりした聖書神学の土台がなければ、組織神学が聖書から離れていく危険性があります（教会の歴史には、そうした例がたくさんあります）。本来の文脈の中で、ある聖書箇所の意味を理解するためには、聖書神学が必要です。そのように、それぞれの聖書箇所の正確な意味を把握することではじめて、組織神学を適切に考えていくことができます。

聖書にはたくさんの大事なテーマがあるので、聖書神学では様々なテーマを取り扱うことができます。この学びでは、聖書のうちに展開する物語を「恥」と「誉れ」の視点から見ていきましょう。「恥」ということばはよく分かって、「誉れ」ということばはあまりピンとこないかもしれません。「恥」とは、一般的に、人の前で恥ずかしい思いをすること、自分を人と比べて劣っていると思ったり、人に十分に認められていないゆえに自分には価値がないように感じることです。一方、「誉れ」は、人前でほめられること、称賛されること、認められること、人の目に価値があると肯定されることです。日本社会で「誉れ」は、誰もが求めているものでありながら、「誉れ」を意識的に求めることは「恥ずかしい」という感覚もあるため、あまり「誉れ」が意識されることはありません。むしろ、「誉れ」を積極的に求めるよりは、なんとか「恥」を避けることに全力を注いでいるのが、私たちの現実ではないでしょうか。

私たちは、「罪」と「赦し」の視点から聖書のメッセージをよく聞きます。もちろんそれも大切なテーマです。しかし、聖書は、恥と誉れというテーマについても、大切なことを多く語っています。日本のように「恥」と「誉れ」という概念が十分に意識されず、ことばにされ

ないほど深く根付いている社会では、聖書の語るこの視点を身に着けていくことは非常に重要です。私たちの人生のすべての領域が福音によって造り変えられていくために、「恥」と「誉れ」について神様が語っていることをともに受け取っていきましょう。

この学びは学内グループや、他のスモールグループで使うためのものですが、ひとりで学ぶこともできます。読み物の部分は、小グループの場合、一人に読んでもらいましょう。その他に、考えたり、話し合ったりするための質問があります。聖書を深く読むための質問や、自分でゆっくり考えるための質問もあります。自分がグループをリードしている場合は、グループメンバーが質問を考えたり、答えを書く時間を十分に取りましょう。その後、メンバーが自分の答えを分かち合うための時間も取ってください。

注：個人的なことを尋ねる質問や、内面の深いところに関わる質問もあるので、無理に全員が答える必要はありません。

1：創造

Q1. あなたは、自分を「誉れ」ある（＝皆から認められていて、価値がある）人物だと思
いますか。どうして、そう思いますか、あるいは、思いませんか。

聖書の始まりには、創造者であり、万物の支配者である神の栄光が描かれています。創造の物語は、神がどれほど偉大で、栄光があるかということの詳細に描き出しています。創世記1章では「栄光」ということばは使われていませんが、他の箇所では、創造された万物（すべてのもの）が神の栄光を表すということが直接語られています。例えば、詩篇19：1によれば、「天は神の栄光を語り告げる」のです。

「栄光」ということばを私たちはそんなに使わないかもしれませんが、このことばは、「誉れ」と関係があります。「誉れ」と関係する聖書のことばは他に、「ほめる」、「あがめる」、「尊厳」、「威光」、「名（名声）」、「敬う」や「賛美する」といったものもあります。これらのことばの中には、王政に関わることばもあり、私たちの日々の生活から離れているように感じるかもしれません。しかし、こうした王政に関わることばが「誉れ」と関わっていることを知っておけば、実は驚くほど多くの箇所で聖書が「誉れ」について語っているのかを知ることができます。

では、そのような「誉れ」が私たち人間とどのように関わっているのか、聖書の初めの物語、創造の記事から学んでみましょう。

◎創世記1：24～31を読んでください。

Q2. 人間は、人間以外のすべてのものとどのように違いましたか。(26節)

「われわれの似姿に」という表現は、いくつかの解釈の可能性があります。古代世界では、支配者は支配された民族に誰が支配者であるかを思い起こさせるために、征服した地方に自分に似た像を立てました。同様に、神が人間を自分に似姿に創造したのは、自分の統治を象徴していたようです。(注：「支配」ということばに抵抗がある人がいるかもしれませんが、古代の支配者の支配と神の統治のあり方は全く違うことに注意してください。)当然、人々は、人間が実際にどのような点で神に似ているのかを問うてきました。知性でしょうか。それとも、霊的な認識でしょうか。あるいは、人格的な関係を持つ能力でしょうか。もしかすると、創世記1章の「われわれの似姿に」というのは、このすべてを含んでいるのかもしれませんが。

Q3. 次の二つの節を比べると、何が異なっているでしょうか。

24節から：

『神は仰せられた。「地は、生き物を種類ごとに……野の獣を種類ごとに生じよ。』』

28節から：

『神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地に満ちよ。』』

その違いは「彼らに」ということばです。光や水、動物や植物を造ろうとした時、神はただことばを発しました。また、動物が増えることを願ったときも、ただことばを発しました。しかし、人間が増え広がることを願った時、神は、「彼ら」に直接ことばをかけました。神は、自分と会話ができる、関係を持つことのできる者として、人間を創造しました。

Q4. 神は人間にどのような役割を与えましたか。(28節) 具体的に、この役割の内容は何だったでしょうか。今日も人間がその役割を果たしているでしょうか。あるいは、果たせていないでしょうか。

創世記1：26-30の内容は、「誉れ」というテーマと関わっています。この箇所と「誉れ」との関わりについてよりはっきりと知るために、詩篇8篇を見てください。

◎詩篇8：1-2を読んでください。

Q5. この箇所で、「誉れ」と関係することばはどれでしょうか。前のページで触れた「誉れ」の単語について参照してください。(注：新改訳2017の2節注も参照してください。)

Q6. この箇所によれば、「誉れ」があるのは誰でしょうか。

◎詩篇8：3-4を読んでください。

Q7. 夜の星を見て、自分がちっぽけだと思うことはありますか。その時、どのような気持ちになりますか。

◎詩篇8：5-8を読んでください。

Q8. 万物の中で、神は、人間にどのような地位を与えたでしょうか。(5節)

Q9. 神は、人間にどのような役割を与えたでしょうか。(6-8節)

Q10. 神は、人間にどのような「冠」をかぶらせたでしょうか。(5節)

この詩篇の始まりの節では、この世の創造主としての偉大な神の栄光が描かれ、終わりの節にも、全く同じことばで、そのことが語られています。しかし、始まりと比べて、終わりのことばにはもっと深い感動が込められています。なぜなら、神はただ万物を造ったことによって偉大であるだけでなく、自分の名誉を私たち人間に分け与えてくださったからこそ、偉大で高貴な方だと言えるのです。万物の中で私たち人間はある意味ちっぽけな存在かもしれませんが、実は、私たちは神のかたちとして創造され、神と関係を持つ特権も、この世界を治める者という名誉ある地位も、神から与えられています。

Q11. 最初に「あなたは誉れある人物だと思いますか」という質問を考えましたが、この学びを通して、自分に与えられている「誉れ」や価値について何が教えられたでしょうか。そのことを素直に受け入れることができますか。あるいは、自分の感覚とはどのようなギャップを感じたでしょうか。

2：墮落

今回の学びでは、神から分け与えられた名誉に対して、人間がどのように背を向けたのかと
いうのを見ていきます。その出来事は「墮落」と言われています。創世記3章について話す
時、ほとんどの場合、「罪」という話題に注目が集まります。しかし、実は、「罪」というこ
とばはこの箇所でも使われていません。むしろ、この聖書の箇所で実際に登場することばは「恥」
であり、墮落した人間の姿を描くのに「恥」ということばが最初に使われているのです。
そこで、今回の学びでは、人間の「恥」へと墮落したことを中心に見てみましょう。

◎創世記2：25を読んでください。

Q1. この時、アダムとエバとの関係はどうでしたか。自分のことばで表現してみてください。

Q2. この箇所が語る「恥」とは、一体何でしょうか。どのような種類の恥があるでしょう
か。恥のことを意味する他のことばには、どんなものがあるでしょうか。

聖書には「互いに恥ずかしいと思わなかった」とあります。もちろん、それは単純に「裸で
あることが恥ずかしくなかった」ということよりも深い意味があります。それは、創造のと
ころで見たように、神様から与えられた「誉れ」をお互いに認め合い、お互いの価値を承認
し合っていたということです。だからこそ、裸であることが互いに気にならなかったのです。
創世記1－2章は、「恥」がこの世界に入り込み、すべての面で人間関係が損なわれてしま
う前の時代の状況を描いています。

この関係性が損なわれ、「恥」へと転落してしまった出来事を見てみましょう。

◎創世記3：1-7を読んでください。

Q3. 木の実を食べることによる最初の結果は何でしたか。(7節)

Q4. 自分たちの人生に生まれた「恥」の問題を、アダムとエバはどのように解決しようとして
しましたか。(7節)

私たちが「恥」の問題を対処しようとするとき、アダムとエバのやり方の真似することがあるでしょう。そのやり方とは、事実を隠し、覆い、秘密にしようとすることです。私たちの人生には、恥ずかしく思うことはたくさんあり、それらを秘密にし、人から覆い隠そうとすることがよくあるのではないのでしょうか。

Q5. あなたの人生には、恥ずかしく思う、人から秘密にして覆い隠していることがありますか。

◎創世記3：8-11を読んでください。

Q6. 「園を歩き回られる神である主」の声を聞いて、アダムとエバは何をしましたか。(8節)

Q7. 神の前で、彼らは、「恥」を感じたと思いますか。

ここで、アダムとエバは、「恥」を何とかするために古くからよく使われる方法を用いています。つまり、逃げ出して、隠れるということです。多くの場合、人は、恥ずべき行いをして、それが暴かれると、新しい町や、新しい国にさえ逃げて、自分のことを全く知らない人の中で、その「恥」を隠そうとします。

創世記3：10では、アダムとエバが神を避けて自分を隠したのは「恥」のためであったとは、直接書かれていません。しかし、彼らは恐れたので隠れたと書いてあります。そして、何を恐れていたかといば、それは神の目だったと言えるでしょう。これこそ「恥」の問題です。10節によれば、彼らの行動は裸であることと関わっています。「恥」が彼らを突き動かしていたのです。

アダムとエバが神のことばに聞き従わずに犯した罪が「恥」をもたらしました。その「恥」はアダムとエバの関係も、神との関係も傷つけました。

Q8. あなたの人生には、神の目に恥となることがあると思いますか。

アダムとエバの物語で、罪が恥を生み出したのを見ました。私たちの人生の中には、その逆の場合、すなわち、恥が罪を生み出すこともあります。多くの場合、感じている恥を避けるために、人は罪を犯すのです。

まさにそういうことが、カインとアベルの物語で起こっています。「罪」と「恥」の関係についてより深く知るために、カインとアベルの記事を見てみましょう。

◎創世記4：1-8を読んでください。

Q10. カインと弟のアベルがそれぞれ捧げたものは何だったのでしょうか。(3、4節)

なぜかははっきり書いてありませんが、何らかの理由で、神はカインの捧げ物を受け入れませんでした。アベルと違って、カインは自分の物から最も良いものを捧げなかったからかもしれません。いずれにせよ、アベルは、神の目に尊く受け入れられました（誉れが与えられました）が、カインはそうではありませんでした。

聖書は、カインのふたつの感情を記録しています。彼は「ひどく怒り」また同時に「顔を伏せた」のです。このどちらの反応も、おそらく「恥」から生まれたものでしょう。カインにとって、自分の弟の前で、自分の捧げ物が神に受け入れなかった事は、恥深い体験だったのです。カインは、辱められて怒り、恥に震えて顔を上げることもできませんでした。

この解釈が正しいとすれば、カインの「恥」は、殺人の「罪」を生み出したことになります。罪と恥は、深く絡み合っているのです。

Q11. あなたの人生の中で、「罪」と「恥」は実際どのように関わっていると思いますか。
「罪」が「恥」を生み出したり、「恥」のゆえに「罪」に走った出来事が思い起こされますか。

3：神の約束

前回の学びで、アダムとエバが「恥」に対処する方法を見つけようとしたことを見ました。私たち人間は、当然、「恥」から逃げ出し、神が本来用意した「誉れ」を取り戻そうとします。

創世記の初めの数章の物語では、「恥」と「罪」が繰り返されます。その中には、「誉れ」を取り戻そうとした試みもありました。バベルの塔の物語に、人間がどのように恥に対処し、全人類に「誉れ」を取り戻そうとしたかを見ることができます。

◎創世記 11：1-4 を読んでください。

Q1. 伝統的な建設方法は何だったのでしょうか。一方、最新の建設方法は何だったのでしょうか。

(3節) この記事は、プライドとどのようにつながりがあるのでしょうか。

Q2. この人々は何を目指して、この町とその塔を建てようとしたか。(4節)

この人々が使う「名をあげよう」という表現は、評判や「誉れ」のことを意味していました。人間の最新の知恵や技術を用いて、この偉大な町を建てることで、彼らは、墮落のときに失った「誉れ」を取り戻そうとしていたのです。「天に届く塔」を建てようとしていることから、その目的が分かります。神と同じレベルに自分たちも届こうとしていました。それは、アダムとエバが目指したことと同じでした。

◎創世記 11 : 5-9 を読んでください。

Q3. 神は彼らの努力にどう応答しましたか。(7、8節)

5と7節によると、人間が何をしているかを見るために、また、彼らをさばくために、神は降りて行かなければなりませんでした。「降りてくる」という言い方は、当時の人間が高ぶって、天にまで届こうとしたのに、彼らの努力の成果はどれほどちっぽけであったかというのを示しています。

◎創世記 12 : 1-5 を読んでください。

この箇所では、アブラム（後でアブラハムと呼ばれる）という人がどのように神に呼び出されたかが書かれています。バベルの塔の物語では、人々は、ともに集まり、力と名声を獲得しようとしていましたが、アブラムは、自分の家族や共同体を手放すように、神に導かれました。神は、アブラムに、家族や共同体が与えてくれるはずの安心や「誉れ」ある地位に背を向けるよう命じたのです。

アブラムの応答は、神のことばに聞き従うことでした。アブラムは、バベルの塔の人々とは、全く違う態度を示したのです。アブラムは、プライドではなく、謙遜を示しました。創世記 15 : 6によれば、アブラムは神を信じ、神はそれを彼の義と認めました。アブラムは神のことばに聞き従う謙遜な人でした。

Q4. 12章で、神はアブラムに何を約束しましたか。

2節 _____

3節 _____

この学びにおいて重要なのは、三番目の「あなたの名を大いなるものとする」という約束です。言い換えると、神はアブラムに名誉を与えることを約束したということです。全世界また全歴史で、アブラムの名前は尊敬されるというのです。一番目の約束は、三番目の約束の一部であり、神はアブラムを「大いなる国民」とすると言います。大いなる国民となることはアブラムが生きた当時の世界で名高い栄誉でした。また、神は、アブラムを通して地上の全ての部族が祝福されるとも約束しました。それは、偉大な民族の先祖となること以上の「誉れ」でした。

以上のように、バベルの塔の物語とアブラムの神に召し出された物語は対照的です。バベルの人々は高ぶる思いから自分の名を上げようとした一方、アブラムは謙遜な人で、神の方が恵みをもって自らアブラムを選び、「誉れ」を与えました。

これらの物語を通して、この世界の「恥」の問題をどのように解決したら良いのかが分かってきます。私たちの世界は確かに「恥」に満ちているところですが、プライドから出る自分の努力によって「誉れ」を再び手にすることはできません。ほとんどの人はプライドをもって、自分を高め、栄誉を獲得しようとしませんが（つまり、プライドからくる自分の努力によ

って多くの人から、特に影響力のある偉い人から、認められ、愛され、大事にされ、評価され、受け入れられようとするが)、そのような高ぶりこそ、人間のすべての問題の始まりでした。アダムとエバが神のようになろうとしたきっかけは、プライドです。しかし、「誉れ」は、ただ神の前でへりくだる人にしか与えられません。アブラムの場合と同じく、真の榮譽は神だけが与えることができるのです。

残る聖書の物語がこれらの課題をより明確にしていきます。

Q5. 自分の人生で恥にどのように対処してきましたか。認めてもらうこと、受け入れられること、尊敬されること、大切にされること、評価されることを、神に期待していますか。それとも、自分のプライドからくる自分の努力によって、自分の恥の問題を解決しようとしていますか。

4：神との契約

聖書は「契約」について多くを語っていますが、私たちにとっては、少し分かり辛いことばです。契約は「平和条約」のように考えると良いと思います。「平和条約」としての契約は、神と人間との間で和平を結ぶ協定のようなもので、条約上様々な責任があります。イスラエルという民との契約によって、神は、全世界の人間の「誉れ」を取り戻し始めるのです。

イスラエルに与えられた「誉れ」について学んでいきましょう。

◎出エジプト記19：1-6を読んでください。

Q1. 神はどのような「誉れ」や特権をイスラエルに与えようとしていますか。

4節 _____

5節 _____

6節 _____

この箇所によれば、イスラエルは神の「宝」になります。「宝」に当たる元々のヘブライ語のことばは、王の個人的な宝などを意味しました。当時の王は、支配する国全体を自分の所有物として持っていましたが、それに加えて、服や宝石なども個人的な宝として所有していました。同じように、全世界は神のものですが、イスラエルは、神にとって特別で個人的に意味のある宝となるということです。

しかしながら、イスラエルがこのように受けた名誉は彼らのうちで留まるべきものではありませんでした。「祭司の王国」という表現が示しているのは、イスラエルが神と人との間に入る仲介者、橋渡しの役割を果たすということです。アブラムにかつて約束された通り、神は全世界の民族を祝福することを変わらずに願っていました。つまり、イスラエル民族を

通して、全世界の人々に栄誉と「誉れ」を回復することこそ、神の計画だったのです。神が全世界の人々に「誉れ」を取り戻すために、神がイスラエルと結んだ契約について見てみましょう。

◎申命記28：1-14を読んでください。

契約というものには義務があり、片方がその条約を破った場合の結果も決められていました。申命記28章では、神とイスラエルとの契約の義務が細かく定められています。神が自分の民に、選択肢を与えました。それは究極的に「誉れ」か「恥」かという選択でした。

Q2. この箇所で「名誉」ということばは使用されていませんが、どのことばがその考えを表していますか。

1 節 _____

10 節 _____

13 節 _____

Q3. 神から受けた名誉を失わないためには、神の民は何をしなければなりませんでしたか。

(1 節)

Q4. 神によって、名誉が再び与えられた神の民の人生はこれからどのようなになると言われていますか。

◎申命記28：15-29、36、37を読んでください。

Q5. この箇所で「恥」ということばは使われていませんが、どのことばがその考えを表していますか。

25節 _____

37節 _____

Q6. イスラエル人は、何をすることによって、この「恥」を自分の身に招きますか。(14、15節)

Q7. 神を拒絶するなら、この人々の人生はどのようなと言われていきますか。

歴史は繰り返されます。神のことばに聞き従わなかったため、アダムとエバは、「誉れ」ある人生から「恥」に満ちた人生へ墮落しました。今度は、イスラエルの民を神は生み出し（「創造」し）ました。イスラエルは、アダムとエバと同じ選択肢に直面しています。へりくだって、「誉れ」ある人生を生きるのか、それとも、高ぶって神に聞き従わず、再び「恥」に転落するのか。

Q8. 世の中では、人が神のことばを無視することで、どのように「恥」が生み出されるでしょうか。また、自分の人生の中では、どうでしょうか。

5：イスラエルの物語

◎箴言29：23を読んでください

Q1. この一節によると、高ぶる人には何が起こると言われていますか。この一節によると、へりくだった人には何が起こると言われていますか。

この一節は、旧約聖書全体の多くの教えを要約しています。また、申命記28章で神に与えられた選択とイスラエルがどう向き合ったかという歴史の良いまとめでもあります。イスラエルの民がへりくだって、神様のことばに聞き従うことで祝福や名誉が与えられた時もありました。しかしほとんどの場合、イスラエルの民は、高ぶって神を無視し、神のことばに聞き従いませんでした。結果として、恥辱や汚名を負うことになりました。

イスラエルの歴史の頂点は、ダビデ王と息子ソロモンの時代です。第一列王記10章には、イスラエルが積み上げた物質的な繁栄とイスラエルが国々の間で受けた栄誉が描かれています。それは申命記28：1の成就でした。

◎第一列王記10：1-13を読んでください。

Q2. シェバの女王はなぜソロモンを訪問したのでしょうか。(1節)

Q3. シェバの女王はソロモンとソロモンの王国からどのような印象を受けましたか。(6、7節)

Q4. ソロモンと彼の民族はなぜそれほど祝福されていたのでしょうか。(9節)

Q5. シェバの女王はどのようにソロモンへの尊敬を表しましたか。(10節)

残念ながら、イスラエルの国の物語は、「恥」と汚名の中で終わりました。ソロモン王のすぐ後、国は二つに分裂します。最終的に、「イスラエル」という北の王国は「罪」の罰として、アッシリヤ帝国に滅ぼされました。「ユダ」という南の王国はその後バビロン帝国に追放されました。ダニエルという人は、バビロン帝国に追放された一人です。

イスラエルの民が罪の結果、どのような状態に陥ったのかを知るためにダニエルの祈りを見てみましょう。

◎ダニエル書9：4-14を読んでください。

Q6. 神の民は一体どのような罪を犯したでしょうか。(5節)

Q7. その罪がもたらしたものは何だったでしょうか。(8節)

Q8. 11節の「のろい」の例を挙げてみてください。(もう一度申命記28：15-29を読んで参考にしてください。)

Q9. 神の民に起こった出来事は、どうして他の人々の目に「恥」であると映ったのでしょうか。(もう一度申命記28：36、37を読んで参考にしてください。)

しかし、神の民が神に従わなかったにもかかわらず、神は忍耐し続けてイスラエルの民に祝福を与えて続けて下さいました。その上、神は、彼らの「恥」がいつか拭い去られ、周りの国の人々さえも神の祝福を体験することを、預言者を通して約束しました。

預言者を通して与えられた神の約束を見てみましょう。

◎イザヤ書45：15-25を読んでください。

Q10. 最終的に、誰が恥や辱めを経験するのでしょうか。(16節)

Q11. 神の民には何が起こるのでしょうか。(17節)

Q12. 18節から神がどのような方だということが分かりますか。

Q13. 神は自分の民にしか重荷を持っていなかったのでしょうか。(22節)

Q14. 最も優れた「誉れ」に値するのは誰でしょうか。(23節)

◎ゼパニヤ書3：9-13を読んでください。

Q15. やがて主の御名によって祈るようになるのは誰ですか。(9節)

Q16. この人々はどの時「散らされた」のでしょうか。(10節；創世記11：8を参考にしてください)

Q17. 恥はどのようにして取り去られますか。(11節)

Q18. どのような者たちが残されますか。(12節)

最後に、以下の質問を考えてみてください。

Q19. もし自分が神だったら、自分に聞き従わなかったせいで、全世界の前で恥を受け、辱められたイスラエルに何をしたでしょうか。神は一体どのようにして、自分の民の恥を取り除くと思いますか。

Q20. イスラエルが経験した「恥」とあなたの人生の中にある「恥」に何か共通点や、共感することがありますか。あなたの人生にある「恥」を神様はどのように取り除いてくださると思いますか。

6：イエスの生涯と死

「罪」と「恥」という問題を解決するため、イエスはこの世に来ました。しかし、そのためにまずイエス自身が「恥」を受けました。だからこそ、イエスが「恥」に苛まれているこの世の人々を解放できるのです。そのため、イエスはまず「恥」の中で生まれ育ちました。イエスの生涯の始まりを見てみましょう。

◎マタイの福音書1：18、19、ルカの福音書2：6、7、ヨハネの福音書1：46を読んで以下の質問に答えてください。

Q1. イエスの誕生や幼少期のどのような出来事や状況が恥すべきことでしたか。

次に、イエスの生き方は多くの場合、イエスに恥をもたらしました。イエスの生涯を見てみましょう。

◎マタイの福音書9：9-11、マルコの福音書1：40-42、ルカの福音書7：36-39を読んで以下の質問に答えてください。

Q2. このような人々と関わったことがなぜイエスに恥をもたらしたのでしょうか。

最後に、イエスは恥辱の中で死にました。イエスの死に様を描く箇所を見てみましょう。

◎ヘブル人への手紙12：2を読んでください。

◎マタイの福音書27：27-44を読んでください。

Q3. イエスをからかい、嘲り、辱めようとした人々の名前を挙げてみましょう。

イエスの十字架刑の記事を読む現代の人々は、イエスの肉体的な苦しみや痛み注目しやすいです。もちろん、その痛みや苦しみは確かに酷いものです。しかし、実は当時の人々にとって、十字架刑で受ける「恥」の方がはるかに問題でした。ローマ帝国では、磔刑という処刑の仕方は公に「恥」を与えるものとして編み出され、誰もが見るように、十字架は幹線道路の道端に立てられました。それは警告でした。ローマの支配に反逆するなら、自分が生まれてから今まで積み上げてきたすべての「誉れ」、あらゆる評価、評判を、不名誉の死によってすべて失うのだと、当時の人々には、はっきり分かったはずで

イエスはその生涯と死を通して受けた「恥」の真の意味は、パウロがピリピ人への手紙でまとめて説明しています。パウロは、まずイエスが「恥」のうちにへりくだっていき一步一步を説明して、次にその「誉れ」がどのように取り戻されたのかを考えます。

◎ピリピ人への手紙 2：5-8 を読んでください。

Q4. イエスが人間と同じようになるのは「恥」であったと考えられます。なぜでしょうか。
(6 節)

Q5. その「恥」を書き表すため、パウロはどのような表現を使っていますか。(7 節)

Q6. 人となって低められたイエスがさらに辱められた出来事は何でしたか。(8節)

Q7. イエスの死の出来事はさらにどのような形でイエスを貶めることになりましたか。(8節)

イエスが一步一步貶められ、低められ、へりくだっていく様を十分に想像し味わってください。

◎ピリピ人への手紙2：9-11を読んでください。

Q8. 9節によると、神はイエスのため、どのような二つのことをしてくれましたか。

Q9. 二つの表現は何を意味しているのでしょうか。名誉とどのように関連しているのでしょうか。

Q10. イエスが神から与えられた地位や身分の結果、何が起こるでしょうか。

(10、11節)

Q11. 最終的な「誉れ」は、誰が受けますか。(11節)

◎もう一回箴言29：23を読んでください。

旧約聖書の物語を思い出しましょう。「誉れ」ある（栄えと栄誉に満ちた）人生を生きるため、アダムとエバは創造されました。しかし、アダムとエバは、プライドのため、「罪」と「恥」のうちに墮落してしまいます。その後、神はアブラムを呼び出して、アブラムを通してイスラエルを生み出し（「創造」し）ました。神は、イスラエルを新しいアダムとエバとして再出発をさせようとしたのです。イスラエルの役割は、神の栄光をこの世に現し、この世の人々を神に呼び戻しながら、すべての人間に「誉れ」を取り戻すというものでした。しかしながら、高ぶりのせいで、イスラエルの物語も失望や「恥」に終わりました。アダムとエバがエデンの園から追い出されたのとちょうど同じように、イスラエルも約束の地から追い出されました。

新しいアダムとして、新しいイスラエルとして、イエスはこの世に来ました。箴言29：23の前半の道（高ぶった人の道）ではなく、イエスはその後半の道（へりくだった人の道）を辿りました。イエスが十字架の死までもへりくだって歩んだ結果、偉大な「誉れ」を神から受け取りました。そのため、私たちにも「誉れ」が与えられる道が開かれました。

Q12. あなたは、自分の人生の中で、イエスの生き様や死に様を同じように迎えることができると思えますか。イエスのような生涯を歩むとしたら、どのような気持ちになりますか。

7：神の子とされること

私たちの罪の赦しのため、イエスが十字架で死んでくださいました。さらに、それだけでなく、イエスは、私たちのうちに痛ましい現実として刻まれている「恥」さえも取り除く道を用意してくださったのです。これこそ、本当に喜ばしい良い知らせです。今まで見たように、私たちの「罪」と「恥」は深く重なり合っています。「恥」が「罪」を生み出すこともあり、「罪」が「恥」を生み出こともあります（自分の「罪」によって自分が「恥」を被ることもあれば、人の「罪」が自分に「恥」をもたらすこともあります）。

しかし、感謝なことに、十字架を通して、私たちの「罪」も「恥」も、どちらも取り扱われています。新約聖書は、いくつかの方法でこのことを語っていますが、その中心的なものは「神の家族の一員になる」というテーマです。私たちがイエスと関係性を持つなら、「恥」に満ちた家族から離れ、「誉れ」ある家族の一員となることができ、新たに「誉れ」が与えられます。

新約聖書では、二つの家族について描かれています。それは「罪」や「恥」に満ちた家族と、「義」や「誉れ」に満ちた家族なのです。一つは悪魔の家族で、もう一つは神の家族です。

それぞれの家族について知るために、いくつかの箇所を見てみましょう。

◎ヨハネの福音書 1：12、13 を読んでください。

◎ヨハネの福音書 8：44 を読んでください。

◎使徒の働き 13：8-10 を読んでください。

◎第一ヨハネの手紙 3：7-10 を読んでください。

◎ローマ人への手紙 8：12-17 を読んでください。

◎ピリピ人への手紙 2：14、15 を読んでください。

Q1. 上の箇所で、神の家族と悪魔の家族についてどのようなことを教えられますか。

イエスの死が私たちの「恥」の問題を解決するひとつの方法は、イエスの助けによって、私たちが自分自身に「恥」をもたらず行動をすることが減っていくということです。神の子どもとして神の家族の一員であることで、私たちの人生が少しずつ変わっていき、「恥」に満ちた生活に背を向けて、神の御前でも、人の前でも、「誉れ」ある人生を生きることができるようになります

しかし、神の家族の一員になることは、「恥」に関してより深い意味を持っています。私たちの誰もが、それぞれ、誰にも言えない、誰にも見せられないような過去の行い、出来事や体験が今も自分に付きまどっているように感じることはないのでしょうか。私たちのせいではなくて、人が自分にしたことへのせいであったとしても、時に、私たちは、深い「恥」を感じ続けることがあります。

神の家族の一員となることの素晴らしい点は、神の「誉れ」が私たちの「恥」を全く覆ってしまうことです。神の子どもであるだけで、私たちには「誉れ」が当然のようにあります。それは私たちの努力の結果ではなく、神ご自身がどのような方であるかということのおかげです。もし神ご自身が恥じることなく、私たちを自分の子どもとして認めてくれていて、価値がある尊い子どもとして見てくれているなら、私たちは自分の恥の現実を違った視点で見ることができ、心の癒しと慰めを得ることができるのではないのでしょうか。まさに、このことが放蕩息子の物語で描かれています。

◎ルカの福音書 15 : 11 - 24 を読んでください。

Q2. 弟息子がしてしまった恥知らずなことは何でしたか。

12節 _____

13節 _____

15節 _____

Q3. どのような立場を失ってしまったと弟息子は思っていますか。その代わりに、どんな立場を受け止めようとしていますか。(19節)

Q4. 弟息子が帰ってくると、父親はどのように応答しましたか。(22-24節)

神のことを表すこの物語の父親は、しもべとして自分の息子を受け入れることで辱めることもできたでしょう。けれども、父親は帰ってきた弟息子を自分の息子として認めることで、弟息子の「誉れ」を回復しました。もしイエスのことを信じるなら、私たちはその弟息子のようです。私たちが深い「恥」を感じていても、神は私たちに「誉れ」を与えてくれます。

新約聖書には、神の家族の一員であることを表す、もう一つの言い方があります。「神の花嫁」という表現です。いくつかの箇所、教会全体は神の花嫁として描かれていて、その表現によっても、私たち神に属する者がどれほど「誉れ」を持っているかが分かります。

◎エペソ人への手紙5：25-27を読んでください。

Q5. 教会の「誉れ」を描くために、パウロはどのような表現を用いていますか。

最後に、以下の質問を考えてみてください。

Q6. キリストの十字架によって与えられた「神の家族」「神の花嫁」という「誉れ」を聞いて、どう感じましたか。自分が「神の家族」「神の花嫁」とされた実感は湧きますか。

Q7. 癒されるために、神にまだ任せることができていない、自分が深く恥じていることはありませんか。(牧師や他の信頼できる人とこのことについて相談することも良いでしょう。)

8：神の子として生きること

クリスチャンとして「誉れ」ある人生を送るのは、確かにふさわしいことです。なぜなら、まず私たちは、「誉れ」ある存在として神に創造されこの世界に置かれたからです。また、もし私たちが「罪」の赦しと「恥」からの癒しを願い、神の家族の一員となっているなら、さらなる「誉れ」が与えられています。

しかし、私たちは、また、日々の生活を通して、私たちの人生のうちに「誉れ」を見出していく必要があります。いくつかの箇所では新約聖書はこの課題について語っています。

まず、パウロがピリピのクリスチャンに何を書いたかを見てみましょう。

◎ピリピ人への手紙 2：1-11 を読んでください。

Q1. イエスはどのように「誉れ」を得たのでしょうか。(第6回の学びでも見た6-11節)

Q2. 3節の「利己的な思い」と「虚栄」は人々の生活や生き方の中で具体的にどのように現れるのでしょうか。

Q3.パウロによると、私たちの心のあり方はどうあるべきでしょうか。(3節)

Q4. 3節の「互いに人を自分よりすぐれた者と思いなさい」というのは、実際の生活の中では何を意味するでしょうか。

Q5. このように人と接するなら、神から「誉れ」がやがて与えられると信じられますか。

次に、ペテロの最初の手紙を見てみましょう。当時、クリスチャンであるだけで「恥」だと、多くの人が思っていました。その中で、クリスチャンとして生きるのは大変だったため、ペテロはこの手紙を書きました。周りの人々のように、一世紀のクリスチャンも自分の「誉れ」に関して敏感で、良い評判を失わないため、信仰を捨てる危険性があったのです。

◎第一ペテロの手紙4：12-19を読んでください。

Q6. 当時のクリスチャンはどのような苦しみを経験していたのでしょうか。

Q7. 苦しみの中で彼らはどのようなことをしてしまう誘惑にさらされてきましたか。(16節)

Q8. その代わりになすべきことは何でしょうか。(16節)

◎第一ペテロ1：3-7を読んでください。

Q9. 悪口や嘲り、恥辱と直面しているクリスチャンにとって、これらのことばはどのように励ましとなったでしょうか。

Q10. 本当の「誉れ」、真の栄誉はどのようにして得ることができるでしょうか。(7節)

この8回の学びを終えるにあたって、ラオディキアのクリスチャンがイエスから受け取った手紙を見ます。

◎黙示録3：14-22を読んでください。

Q11. この町のクリスチャンの高ぶりはどのように現れていますか。(17節) しかし、イエスは彼らをどのように見ているのでしょうか。(17節)

Q12. 18節の「裸の恥」という表現を読むと、私たちが見て来た旧約聖書のどの箇所を思い出しますか。

Q13. 恥を覆うための「衣」は誰から買わなければなりませんか。(18節) この比喩的な言い方は実際に何を表現しているのでしょうか。

Q14. イエスの模範にならうなら、どのような「誉れ」が与えられるのでしょうか。(21節)

Q15. 21節と詩篇8：5、6の関連は何でしょうか。どのように内容が異なっていますか。

創世記から黙示録まで、聖書の物語の中で、「恥」と「誉れ」がどのように扱われているかを見てきました。本来は「誉れ」ある者として神に創造されたのに、私たち人間はプライドのせいで「恥」のうちに墮落しました。聖書の物語の中で、多くの人々がプライドによって「誉れ」をもう一度つかもうとしましたが、へりくだって罪を悔い改め、栄誉ある神の家族に入ることなしに、その「誉れ」を取り戻すことはできません。

本物の謙遜の模範として、イエスが来ました。アダムやイスラエルと違い、イエスは恥に墮落せずに、謙遜のゆえに、人の罪の赦しのための十字架の死にまで至りました。それゆえ、イエスは神から、真の「誉れ」を受けました。もし私たちがイエスの模範に従って歩むなら、その最終的な「誉れ」が私たちにもやがて神から与えられるのです。

最後の質問です。

この8回の学びを通して、「恥」と「誉れ」について、何を教えられましたか。

自分の「恥」や与えられている「誉れ」についてどんなことを受け取りましたか。

あるいは、どんなことを受け取るが難しいと感じましたか。

イエスに従って歩むことに関して役立つことがありましたか。

グループで分かち合ってください。

発行日 2024年3月初版発行

著者 フィリップ・マイルズ（元KGK主事） 島田祐也（KGK主事）

装丁 三浦杏子（KGK卒業生）

発行者 キリスト者学生会

発行所 〒101-0062

東京都千代田区神田駿河台2-1 OCCビル402号室